

前回の最後の31節は「しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、『メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか』と言った」という言葉であった。そして、ここでの「群衆」は、主イエスを捕らえようとしている「エルサレムの人々」とは異なり、ユダヤ当局者の影響を受けていない人々で、彼は素直にイエスを信じたが、その理由は、主イエスが「多くのしるしをなさる」方であるからだということを確認した。そしてこのような信仰を主イエスは信用しないことを、2章の23節以下の言葉からも分かることを確認した。

本日は、このような群衆の言葉を聞いた「ファリサイ派」の人々の動きを伝えるところから始まっている。

32節. 「ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。」

ファリサイ派の人々と祭司長たちが一つになって、主イエスを捕らえようと下役たちを遣わすが、この努力は無駄であることは30節から既に分かっている。主イエスの「時」(カイロス)が来るまで、人間がいくら主イエスを捕らえようとしても、捕らえることはできない。

33節. 「そこで、イエスは言われた。『今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。』」

【NKJV】 Then Jesus said to them, "I shall be with you a little while longer, and then I go to Him who sent Me.

主イエスはこれまで幾度もなく御自身のことを「遣わされた者」として語っておられた(6:39、57、7:16、28等々)。ここではご自分を「お遣わしになった方」、すなわち父なる神様の「もとへ帰る」と言われる。

「帰る」と訳されている言葉は、「行く」という言葉(ὑπάγω、ヒュパゴー)が使われている。この言葉は新約聖書の4つの福音書のみで79回使われて、その中でヨハネによる福音書では32回使われている。例えば以下のところである。

8:14 イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをすとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。

8:21 そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」

- 16:5 **今わたしは、わたしをお遣わしになった方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。**
- 16:10 **義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、**
- 16:17 **そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言うておられるのは、何のことだろう。』**

「今しばらく」とは、父なる神様が定めた主イエスの時（十字架と復活、昇天）までの短い時（ヨハネ福音書で言えば約半年。秋の仮庵際での言葉で、恐らく翌年の春、過越祭の前日に十字架上で殺され復活するまで）。主イエスが肉体をもって弟子たちと「共に」おられるのは、「今しばらく」の時だけである。いつまでもではない。

34 節. **「あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」**

「捜す」と訳されている言葉（ζητέω、ゼーテオー）、探し出す、探し求めるという意味で、ヨハネによる福音書の7章において11回も用いられている。人々が主イエスを様々な意味で捜している、求めている、その一方で主イエスは、御自分を遣わした神様の栄光を求めている。そういう形で何度も出てくる。例えば7章11節で、ユダヤ人たちは、主イエスを捕らえて殺そうと思い「**あの男はどこにいるのか**」と捜す。今日のところでは、そういう意味だけではなく、むしろユダヤ人が救い主としての主イエスを探し求めるにはもはや手遅れになってしまうのだという意味で「**捜す**」という言葉が使われている。主イエスを殺そうと思って捜す人々が、実は自分でも気づかぬ心の奥底で、命を求めて救い主を捜す。無意識のレベルで救いを求めて捜すことになる。そういう含蓄がこの言葉の中にはある。

「彼らは自分たちが除去した者を探す（ゼーテイン）のである。それは彼らがイエスを殺そうとしながら、真理がイエスのもとにあることに気づいているからである。あるいは彼らが被造（1:10）であることを否定しようにもできないのである。この「探す」は、従って、単純な、行方不明者を探すというのとはわけが違う。自分たちでなき者として、それを探すという矛盾した行為なのである。」（伊吹雄）

「**わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない**」。主イエスを拒絶し、排除するユダヤ人は、主イエスがこれから行く所に行くことができない。それは主イエスが拒否しているのではない。主イエスの招きを拒絶するが故に、彼らは主イエスがおられる所に行くことができない。すなわち、自ら求めている救いを、自ら排除してしまう。

- 3:17 **神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。**
- 3:18 **御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。**

3:19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。

35 節. 「すると、ユダヤ人たちが互いに言った。『わたしたちが見つかることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるとでもいうのか。』」

主イエスの言葉をユダヤ人たちは誤解する。「それは霊に対する肉の次元を示すのであり、逆に言うと 33 節以下のイエスの言葉は、霊の次元のみで理解可能なのであり、ただ誰かが死んでしまってそこへは行けないということとは根本的に違う。しかしユダヤ人の理解はそこまで届いていない。」（伊吹雄）。 ついに、ヨハネによる福音書は、主イエスの言葉に対するユダヤ人たちの誤解を強調しているが、このことについて伊吹氏はこういう。「ユダヤ人たちが肉の次元でしか考えることができないということを強調するが、その理由は、彼らが盲目だからである（9:40 以下、12:38 以下）」

「離散しているユダヤ人」（διασπορά、ディアスポラ）。パレスチナに住んでいるユダヤ人に対して、地中海沿岸のギリシア世界、ローマ世界、エジプトなど、海外へ移住しているユダヤ人のこと。その中で「ギリシア人の間に離散しているユダヤ人」とは、ギリシア人やギリシア語を話す人々の間に離散しているユダヤ人という意味で、彼らのところに行き「教えるとでもいうのか」。

新約聖書の中で「ギリシア人」とは、異邦人を代表するような言葉（ローマ 1:16）。ユダヤ人は、異邦人は暗闇に住む、神の救いからもれている人々、と考えていた。

ここで突如「ギリシア人」という言葉がこの福音書において初めて出てくる。そこで伊吹氏は次のようにいう。「ユダヤ人は受難の結果、ギリシア人のもとで宣教が起こることを知らずに、それを預言しているともいえる」。つまり、主イエスのご受難と復活、聖霊降臨後、弟子たちはギリシア人、ギリシア語を話すところに行き宣教を開始し、多く教会が生まれるようになるが、そのことを、ここでユダヤ人の誤解から生じている言葉を通して預言しているということであろう。

36 節. 「『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。』」

「ここではいかにイエスの言葉の理解が霊なしには不可能であるかを、文字通り繰り返して示す。しかしユダヤ人の繰り返しにはイエスの言葉のうちの決定的な部分、すなわち「今しばらく」という時の切迫性と、「自分をお遣わしになった方のもとへ帰る」というもっとも重要な部分が抜かされている。これらの決定的ことから、まさに彼らが繰り返し考えるべきイエスの言葉の内容は、すでに彼らの注意の外にある。聞き流されたのである。」（伊吹）